慈濟ものがたり

233

慈濟基金會
2016年5月

TZU CHI ● ツーチー

2016 ● 5

慈濟ものがたり

NO233

慈濟基金會

今月の表紙

劉川小学校、放課後生徒たちは自然に一列になって帰路へつく。最も遠い生徒の家は一時間半も歩かねばならないが、学校へ来る喜びは苦痛に勝る。

（撮影・黄筱哲）

表見返し●

文・證厳法師／訳・済運／撮影・楊秀麗

大愛のエネルギーを広める

貪、瞋、癡は鋭利な矢の如く
繭を作るように自分を束縛し
人も自分も傷つけてしまいます

無明を振り払って
欲を断ち切り
自分を利すると共に他人も利し
大愛のエネルギーを広めることです

目次

【社論】
半世紀越しの希望工程を継続させる　慈願／訳　4

【特別報道・甘粛省の変化と移転】
❑環境移民を支援　済運／訳　8
❑劉川慈済小学校
環境保全という新しい課題に向かって　慈願／訳　28

【人文風景】
台湾原生魚類の守護者・鍾宸瑞　済運／訳　38

【主題報道・台湾屏東】
減災希望プロジェクト　黒川由希／訳　56

【證厳法師のお諭し】
善の力が合わさり
この世に福をもたらした　慈願／訳　74

【大地の守護者】
慈済青年ボランティア奮闘記　黒川章子／訳　86

【衲履足跡】
人生の経済学　心嫈／訳　96

【お板さんが法の香に浸る】
愛を心の底に植えつける　済運／訳　103

慈済大事記【四月】　済運／訳　106

大愛のエネルギーを広める　済運／訳　**表見返し**
漫画《清らかな智慧》　済運／訳　**裏見返し**

【社・論】

半世紀越しの希望工程を継続させる

◎訳・慈願

旧正月の除夜を迎える前夜、台湾の南部で地震が発生した二週間後、慈済が再建援助をした花蓮、台東地区の十五校の老朽化した校舎の改築起工式典を行った。屏東にある五校はすでに完成し、教師と生徒は新校舎に入る準備をしている。

これは「減災希望プロジェクト」と言われる校舎再建プロジェクトである。ことの発端は二〇一四年、證厳法師が南部を行脚した際に、町や村で老朽化した校舎の危険性について心配する声を聞いたことに始まる。ある校舎はほぼ危険建築物と化しており、万一地震が発生したら生徒や教職員はどうなるか、子供たちの教育はどうなるかと心配されていた。

證厳法師は学校と病院は倒れてはならないという理念を持っている。ただちに防災のために再建すべきで、災難発生を待ってから再建するのでは遅過ぎると考えた。だが、教育部の学校再建に対する年間予算はわずか五十億元（一元は約三・四円）あまりである。台湾全国で二十二の県と市にある万単位の老朽化した校舎の修繕は進行してはいるが、焼石に水のような状態だ。

慈済が援助して、高雄、屏東、花蓮、台東地区の二十一の校舎の補強工事が進められた。また、花蓮の五十九の学校に三百個のトイレを取りつけた。

再建援助はただ学校を建設するだけでなく、一九九九年の台湾中部大震

災の再建援助の原則と経験をもって、現地の人文、地理、景観、環境緑化を考慮し、人文の雰囲気溢れる新校舎を建築して、生徒が充実した学園生活を送れるよう期待していた。

旧校舎の解体に先立ち、慈済ボランティアは家々を回って、建設期間中に交通路線が変更されることや、騒音やほこりの問題が生じることへの了承を求めた。そして執り行った解体式典には卒業生が一同に会し、感謝とお別れの気持ちを込めてかつての学び舎を記憶に留めた。

ボランティアが学校に行った時、先生と生徒たちは塀にはめこまれた絵を取り外していた。台東のボランティアは生徒たちに記者になって学校再建の記録を採るように勧めていた。学生はこれによって郷土のことに関心をもつようになり情が芽生える。再建の記録を作成することは一種の教育にもなる。

「減災希望プロジェクト」の中で、多くの学生の心に無数の祝福と成長記憶を残すことであろう。同じように慈済が成立して以来歩んできた五十年の記憶も無数の人の心に記憶を留めている。慈善、医療、教育、人文の各分野における社会貢献は、数々の苦難を伴ったが人々に温かい希望を注ぎ、多くの人の再生を応援してきた。

慈済は誠正の精神、信実の原則を以て、この世に大愛を伝播している。強固な基礎で、菩薩の情を以て自覚すると同時に人をも覚醒させ、社会福祉と生あるものに関心を寄せ、これからも人生の希望工事が続けられることを願っている。

【主題報道】

環境移民を支援する
甘粛省の変化と移転

◎文・楊舜斌／訳・済運／撮影・黄筱哲

●靖遠県雙龍郷は遠く離れた辺鄙な村で、一組の夫婦が洞窟に住んでいるが、この村には3世帯が洞窟に住んでいる。洞窟は冬は暖かく夏は涼しいが、わずかな畑の収穫では食べて行けず、ほとんどの人は山を下りている。

【開拓して放牧した結果、土地が枯れた】

開墾すればするほど土地は荒れ、荒れたからと開墾をしていく。そして、生態環境は悪化し、何を植えても育たなくなったため、多くの農民が黄土高原で羊の放牧をし始めた。しかし、羊やヤギは植物の根まで食べてしまうため、その土地はさらに貧弱になってしまう。幸いにも近年、政府の管理下で牧羊者の放牧区域が少しずつ規制を受け、土地は休まされるようになった。

【洞窟住居、貯水槽、お年寄り】

呉鳳鳴はその日、使う水を貯水槽から汲み上げた。慈済が支援建設してくれた貯水槽は今年で八年になるが、水質はいまだに良い。しかし、昨年は雨が少なく、貯水量も減った。「節水しながら使えばまだ大丈夫です」と呉鳳鳴が笑いながら言った。お年寄り二人は遠くで働いている息子がお金を稼いで帰ってくれば、生活は改善されると期待している。

黄河上流が流れる甘粛省。前世紀にはこの黄土の地は豊かな水草に覆われ、誰もが安泰した生活を送っていた。しかし、気候異常が日増しに深刻になり、住民は農耕で収穫を得ることができなくなった。地質が特異な上に土砂が大量に流され、農民は砂嵐と干ばつに抵抗できず、何世代にも渡って貧しいままである。環境の悪化は想像を超えるもので、春の砂嵐は砂塵を遠く千キロ離れた台湾にまで飛ばす。

多くの慈善団体が甘粛省の住民と共に干ばつに対抗してきた。慈済は十八年間、貯水槽の建設から生態系の保護、そして村単位での移転を支援してきた。住民は水のない生活の苦しみを経験してきたが、痛みを忍んで故郷を離れた。山を封鎖して植樹し、大地に休息を与えて故郷を蘇らせようとしている。

水は素晴しいものであると同時に怖いもの

世界銀行元副総裁イスマイル・セラジェルディンは一九九五年にこう語っている。二十世紀は石油が戦争の原因になったが、二十一世紀は水が戦争の原因になるだろう、と。人間は石油がなくても生存はできるかもしれないが、食糧を生産する水がなければ、生存は容易ではなく、これが黄土高原の人々が直面している問題である。

甘粛省の四分の一が黄土高原で、甘粛省蘭州市から車で二時間もかかる靖遠県は、黄河流域を除けばほとんどが黄土の高原で、海抜千メートルから三千メートルの高さにある。何千何万という溝が形成されているが、年間の平均降雨量はわずか二百四十ミリで、蒸発量は千三百ミリに達する。台湾の年間平均降雨量二千五百ミリと比較すると、わずか十分の一にも満たない。

黄土高原は世界で最も土壌流出の激しい場所で、生態環境も最も脆弱である。ここを流れる黄河は世界で最も土砂を多く含む河川になり、年間平均して十六億トンもの土砂を運ぶ。上流の透き通った水はここを通ると、その名の通り黄河になってしまう。これほどひどく土砂が流出する主因はやはり地質の特性であるが、その上これまで規制されてこなかった開墾や伐採のせいで、このゴビ砂漠から飛んできた砂は植物の覆いをなくしてしまった。

砂浜に水を流す様子を想像してみると分かるが、砂には簡単に水が流れる経路

ができ、一滴もなくなるまで水は砂に沁み込んでしまう。これが黄土高原の状態で、やっと農民が望む雨が降っても、水はあっという間に地面から消えてしまう。雨脚が激しい時は、水は鋭い剣のように一気に斜面を切り裂いて流れ落ち、何万もの溝のある風景を作り出す。

「水を思い、語り、呼び、夢に見る」ことは農民一人ひとりの心からの願いだが、雨が降ったら、素早く谷から逃げるか、高所に向かって上り、雨が止んでから谷に戻ったらよい、と現地の人は注意するようにしている。それはこれまでに何回も不幸な事故が起きているからで、人も車も土砂に埋まって行方不明になるからだ。ある日、雙龍郷に行く途中、深い谷のような溝を目にした。そこはかつて村と村を結ぶ道路だったとは信じ難かったが、雨水はここでは諸刃の剣になることを否が応でも信じないわけにはいかなかった。

貯水で干ばつに対抗し村を移転する

一九九八年、慈済基金会は中華慈善総会の提案に基づき、初めて甘粛省を視察した。ボランティアとして参加した張文郎によると、当時、王端正副総執行長、荘振基、鄒永升、許秀綿、林櫻琴ら六人と甘粛へ一週間視察した時、通渭縣と會寧県の住民から、一生に三回しか風呂に入らないことを聞いた。生まれた時、結婚する時、死んだ時である。一同は大きなショックを受けると共に、それほど水に不足している所があるのだろうかと思った。

生活のため、各家庭からは少なくとも一人が数時間かけて水を汲みに行かなければならない。そして、干ばつがひどくなるにつれ、湧き水はどんどん少なくなり、より遠くへ行かなければならなくなった。しかし、貯水槽を作るには六百元もかかり、村人には負担しきれなかった。

視察団が帰国して報告した後、貯水槽の支援建設を開始した。證厳法師は現地の状況を尊重すると共に、品質を重視するよう指示した。そこで、チームは始めから伝統的な土の水槽を除外し、コンクリート製の水槽を考慮した。菱型、楕円形、花瓶型、球状など数種類の水槽から施工の難易度や適応性、効率などを考え、結果的に球状に決定した。

一つの貯水槽を作るのに一万六千円ほどかかるが、貧しい農民が水を汲む運命から抜け出させることができるのだ。こ

●土砂が流され、人々は生態環境を重視し始めた。森林保護員の王雙行は機敏に急な坂に片足を乗せて、この山の苗木の健康状態を確認する。

の十一年間に慈済は甘粛省の六つの県で、合計一万九千個余りの貯水槽を建設した。

靖遠県は一九九一年から六年続けて大干ばつに見舞われ、年を追う毎に雨が少なくなり、山の上の住民は生存するための水にも事欠くようになった。靖遠県政府は慈済プロジェクトオフィスを設け、水利局からも専門人員が駐在し、慈済が靖遠県で進める抗干ばつ計画と慈善活動を支援した。

「貯水槽ができても、雨が降らなければ徒労に終わってしまいます」と慈済プロジェクトオフィスの顧秉柏が言った。この十年間、干ばつは日増しにひどくなり、貯水槽はかつて山の上の住民の水の問題を解決したが、気候の変動が激しくなるにつれ、町でも干ばつの影響を感じ取るようになった。

政府は「黄河灌漑工事」を進めている。それはポンプとパイプ式用水路で黄河の水を海抜の低い高原地帯に送り、農業用と生活用に提供する計画である。高海抜に住む農民で、経済力のある人は既に下山して新興農業地区で生活している。残ったのは極度に貧しい人や障害者で、政府の救済に頼るしかないが、根本的な解決にはならず、村を移転するしか残された道はない。

何度も討論した結果、慈済は劉川郷来窯村を第一期の移転村に選定し、二〇〇八年三月に村の建設が始まった。海抜二千メートル以上の若笠郷山間の二百十世帯の貧困者は山を下り、その時から新しい生活が始まった。

一回目の成功事例に基づき、慈済と靖遠県政府は二〇一三年に第二期の移転計画を打ち出した。二〇一五年九月に工事が完了し、三百世帯が五合郷白塔慈済村

で新年を迎えると共に新たな人生を歩み出した。

天気に左右される人生

今年一月七日、台湾、青海、重慶、四川、陝西などから六十数人の慈済ボランティアが靖遠県東升郷に到着し、現地ボランティアや新住民と共に三百九十五世帯を対象に、冬季の物資配付活動を行った。

東升郷は慈済が靖遠県で冬季配付活動を行った八カ所目の町である。二〇一一年の双龍郷、石門郷に始まり、続いて若笠郷、大蘆郷、高湾郷、五合郷、靖安郷、そして今年の東升郷の合計で約七千世帯、二万四千人に物資の配付を行ってきた。

慈済プロジェクトオフィスの王益主任はこう語った。靖遠県の人口は約四十八万人で、農業人口は四十二万人である。そのうちの十四万人は天気に左右される山上での生活をしており、長年の努力を経てもいまだに七万人が極貧の生活を送っている。

東升村自治会の包偉主任によると、東升村から三十人余りが下山して物資を受け取りに行ったが、全て「五保戸」といわれる生活保護者や障害者、または病気で貧しい家庭である。彼は慈済が絶えず支援に来てくれることにとても感謝している。村で貯水槽を建設してくれたほか、貧困家庭の子供に学習用品や綿の上着、肌着、布団、生活用品、米などを支給してくれたため、村人が安心して厳しい冬を越すことができたと話す。

私とカメラマンは冬季配付活動の隊列に随行して東升郷の村人を訪問した。一時間近く車に揺られ、馱西村に着いた。そこはまるで廃墟のように薄暗く、崩れかけた土塀や錠が掛った扉など、大部分の人は既に引っ越していて、数戸だけが村に留まっていた。

そこの土は今でも鮮明に覚えている。歩く時、軽く足を下ろしても、砂がいっぱい舞い上がり、泥んこになった水牛が海に入るかのような恰好になってしまう。どうやって足を下ろしたらいいのか分らなかった。慈済プロジェクトオフィスの職員によれば、これは一般的な黄土高原で、黄土層がもっと厚い若笠だったらもっとひどいことになっていただろう。

山を封鎖して植林し、土壌を養う

慈済が水を溜める貯水槽を建設したり村の移転支援をしてきた期間、現地の人

も生態系の保護が急務であることを意識し始めていた。

靖遠県石門郷にある哈思山脈は靖遠県唯一の自然林で、周りの住民が使用する飲料水の源でもある。そのため、政府はそこを省クラスの自然保護区に指定し、林業局も近隣地区に森林保護ステーションを設けて森林保護員を配置している。多くの人員は現地の住民で、彼らが山道に詳しいのと同時に、彼らに自然を破壊するような仕事から転職するよう促している。

そこはかつて過度の羊の放牧と害虫のために林が消滅したが、近年、農耕の廃止と山を封鎖して植林する政策が功を呈した。その効果はてきめんで、森林が既に山の半分以上を覆うようになったのだ。今は冬だが、遠く哈思山脈には松や蔦類を望むことができる。

石門郷老崖村には百五十四世帯が住んでいたが、今はわずか二世帯が残っているだけである。そのうちの王雙行は森林保護員で、早朝五時に出かけ、夕方まで帰って来ない。毎日十時間以上、山道を歩いて受け持ち地区を見回る。家には母親が一人なので、彼は日が昇る前に二往復して水を汲んで来てから、シャベルを持って出かける。彼の仕事は森林内の自然発火の撲滅以外に、牧羊者の侵入を阻止することである。春には害虫駆除の薬を携行したり、空き地に植樹をする。昨年は二万八百本の木を植える目標だった。今、はっきりした木の数は分からないが、森林はおおよそ三千三百ヘクタールほどに広がっている。

中国は一九八〇年から植樹計画を始めたが、技術と持続力が伴わず、数十年経

●靖遠県の町から劉川郷までの幹線道路に、現代版の「愚公山を移す」のような土地があった。政府はその丘を平にし、二・五キロの道の両側に白陽樹と松を植えた。将来、これらの木が大木に育つよう、その下にパイプを敷いて定時に水が出るようにしている。

っても変化に限りがあった。二〇〇二年になって、農耕を減らして灌漑による植林政策を始めてからやっと、功を呈するようになった。

二〇〇七年、中国全土で農耕を減らして植樹する運動を展開し、至る所で数千ヘクタールの農地が返却された。初めは十分に食べていけないのに農地を返却しなければならないことに農民の反感を買った。しかし、後で政府が補償金を出すことになり、返却した土地分だけ毎年支給されるようになった。干ばつで収穫が得られないため、農民は政府が統一運用することに同意した。

靖遠県の山間は返却する面積が毎年増え、二〇一五年の時点で一万六千六百ヘクタール余りに達した。これらの土地は地方政府が統一してサジーと漢方薬に使われるマメ科の植物、樗條を植えて砂の流出を食い止めたり、根茎で育ちやすい植物を植えた。成長した果実を売ることができると共に、根の部分は水分を保って土壌の保全に役立っている。

初めの頃、植林しても人を使って定期的に水を汲み上げていた。全県の役所がそれぞれ責任を負っていたため、よく公務員が植樹したり水やりをしたりする光景が見られた。二〇〇八年になって点滴灌漑技術を導入し、植樹する時にホースを埋め、山頂に貯水タンクを設置して、天気の乾燥状況に従って水を流すようにした。樹木の根に完全に吸収させるために、水を流す時は丸一日流すが、それで樹木の残存率が大幅に上がった。

この他、靖遠県では山を封鎖して植樹する政策も行っており、森林にする地域を鉄条網で囲み、牧羊業者の侵入を防いでいる。政府は毎年、二千万元の造林予

●今年、慈済は東升郷で１３０７人に冬季の配付を行い、笑顔が溢れた。一度きりの物資で生活を変えることはできないが、安心して年を越すことはできる。

算を出しており、職員も毎年、給料から百人民元（一人民元は約十七円）出して緑化運動を支援している。

環境保全意識が高まり塵が減る

靖遠県にはこういう川柳がある。「風が吹けば石が転がり、木の数は電柱よりも少ない。風は一年のうち春から冬まで吹き荒れる。外出時、向かい風なら、歩くのは至難の業。朝に払い落とす塵は重みを感じるほど」

春から冬まで吹き荒れる風は、黄土高原を形成した原因の一つであると共に、住民の困窮した生活の源でもある。顧秉柏は二〇〇八年のことを覚えている。彼が劉川郷に貧困住民の調査に行った時は春で、いつも砂塵が吹き荒れていた。空から地に至るまで覆っていた黄砂は空を黄色に染め、目の前の道もはっきり見えなかった。

綿々と飛ぶ砂はあらゆる隙間に入り、夜間、扉や窓をしっかり閉めないと、目が覚めた時、口の中に砂がいっぱい入ってしまう。朝一番に扉を開ける時は注意が必要で、まず隙間を開けて手を外に出し、積もった砂を払い除けてから開けるのである。だから、家という家の門の外には着古した綿の上着を縫い合わせた布がかけられている。それは防寒に役立つと共に砂が屋内に入るのを防ぐ役割がある。

「しかし、そういう状況は次第に減ってきており、昨年、砂嵐は一、二回しかありませんでした」と顧秉柏が言った。その成果は近年、政府が大々的に推し進めてきた環境政策に帰し、靖遠県の顕著な変化に気づくことができる。今、県全体で六千六百ヘクタール以上が管理区域の森林になっている。樹木はまだ小さいが、草が生えてきている。長期的に政策を進めて行けば、山々は草に覆われるようになり、禿げた黄土ではなくなる。靖遠県が黄土高原で行ってきた成功例で近隣の県や市も実行に移しており、それによって砂塵による害が大幅に減ってきている。

黄土高原は本当に整備することによって黄土でなくなるのだろうか。その答えはすぐには分らないかもしれないが、環境保護意識の高まりと共に、少なくとも政府から民間まで、この土地を緑に変えようと努力している人々がいる。十年先、二十年先、小さい木は大木に成長し、黄土高原はもはや黄色ではなく、果てしなく緑の草原になっていることを、私たちも現地の人と同じように期待している。

劉川慈済小学校
環境保全という新しい課題に向かって

農村の小学生は世界が直面する問題に向き合っている
教師は環境保全の教育に励み、善の種を植える。
樹木は十年、人は百年と言われている。

◎文・楊舜斌／訳・慈願／撮影・黄筱哲

●教室の黒板に環境保全に関する思いを書く子供たち。劉川小学校の先生と生徒は図案の中に環境保全の意味を込め、土地を愛護するよう呼びかける。

「弟子規、聖人訓、首孝弟、次謹信、汎愛衆、二親仁、有余力、則学文」と朗々と暗誦する声が教室から伝わってきます。教育は知識の礎です。農村の親たちは学問によって現状を変えられるよう願っています。

来窯慈済村にある劉川慈済小学校は、約一・四ヘクタール（四千四百坪）の広さに、生徒が二百人あまりの小さな学校です。規模は小さくても周囲の環境は美しく、付設の幼稚園と託児所があります。二〇一二年に開校して以来、家長たちが注目しているのは、教師たちの優秀さです。同校は人文精神、伝統への感謝、人に尽くす心、博愛、環境

保全の教育に重きをおいているのです。

慈済小学校では生徒が幼い頃から、親や先生、社会に感謝することを教えています。生徒はその日にあった感謝したい出来事を手帳に書いたり、または学校内で放送したりします。

それ以外に、舞踏、書道、電子オルガン、笛、二胡、ハーモニカ、将棋など十項目の中から二項目を選ばせて学ぶ「少年宮」というカリキュラムを設け、幼少時から芸術的なたしなみを培っています。

劉川慈済小学校が開校した二年目には、劉川郷の小学校の中で三番目に優秀な学校に選ばれました。二〇一四年には、甘粛省の「楽しい学校の模範」の認証を受けて、靖遠二中と靖遠師範学校と共に農村で唯一認証を受けた三校です。

そのほか、文化建設模範学校、徳育工作模範学校などの賞状を受けていました。李元軍校長は、学校の資金はあまり十分ではないので、頑張って評価を受けて得た賞金によって、資金不足を補っているのです。

教師と生徒が考えを変える

二〇一五年九月の新学期に、古い食堂を環境保全の資源回収所に変え、授業の中で、家でも回収物を分類し食べ物は残さない習慣をつけるように教えていました。

回収物は紙類、プラスチック、ガラス瓶、ペットボトル、電池に分類し、ポスターに張り出しています。これらは先生たちが、震災後に慈済が支援建設した四川前進小学校へ行った時に学んだものでした。

王教師が環境保全を指導していた始めの頃に、さまざまな難題にぶつかってい

●環境保全を重視している馬耀森先生が辛抱強く生徒の疑問に答えている。

たのは、当地にはそれに組み合わせる回収システムがなかったからですが、それでもあきらめずに工夫して行っていました。雷副校長は現在、週一度の活動をしていますが、それでは足りないと思って、子供たちに習慣をつけさせるために一日一回にしています。先生たちが環境保全に力を注いでいるので、生徒たちは、道端にゴミを捨てなくなっただけでなく、ゴミを見たら拾っています。

副校長は、環境保全とは無理やり生徒に押しつけるものではなく、生活の中で自然に身につけさせるべきもので、先生たちはゴミを見たら自分が拾い、生徒に指図しません。誰が拾っても環境保全であり同じ結果ですが、子供たちが受ける感じは違ってきます。

李校長は、砂漠化について教える時、なぜ砂漠化したのか、その原因を生徒に考えさせ、水と環境がいかに重要であるかを教えています。そして植樹記念日や国際節水日、世界環境日などのイベントが行なわれている中で、地球の大切さと守らねばならないことを教えています。

六年一組の生徒である王雅棋と楊文嬌は環境保全所の所長を受け持ち、陳建徳が助手になって、毎週金曜日に各学年の生徒が持ってきた物を分類し整理しま

す。疲れた時は、地球のためになっているのだと思えば、嬉しくなると言います。

緑化した春の日を迎えて

慈済小学校の校庭には四千株近い苗が植えられています。主に生存率の高い槐や柳、または乾燥に強い松と白楊です。その世話をしているのは、総務主任の馬耀森で「私はこれらの苗を、卵が孵化してひよこになるように、大切に栽培して四、五月頃には緑の芽が出るのを楽しみにしています。きれいでしょうね」と嬉しそうに言って、花園を案内してくれました。

彼はそのために、村役場に裏山から水を引く申請と、塩化した土壌に撒く薬剤を申請していました。授業以外の大部分の時間は、苗や畑の水やり、草取りなどで、緑がだんだんと増していくのが最大の喜びだと言います。彼は靖遠一中卒業後、大学に行かずに山間部にある崖梁小学校の教師になりました。校長ともう一人の教師の三人で、九十人以上の生徒を担当しています。

学校は全額の月給を出せないので、十九歳の馬耀森の月給はわずか二十九元です。村役場は痩せた土地を月給の補助金として提供していますが、その収穫は

一年でやっと五百元でした。彼は「二千平方メートルにフジマメを植えましたが、その収穫は籠五つにも満たず、ほぼゼロに等しいものでした」と言いました。

若笠で二十二年間教師を務めていた彼の父親は、年老いた両親の世話をするため、二〇一〇年に異動届けを出し山の下の学校に転勤していました。若笠で校長を勤めていた時に亡くなった父のことを思い出し、馬耀森は目頭を熱くして語りました。

「父は教育に全精力を傾け、忙しい生涯を送りました。とくに基礎教育を重視して僻地に多くの学校を建てました」と。その父親の影響を受けて彼も基礎教育を重視し、低学年には難しい道理を教えず、良い習慣をつけさせることから始めていました。

時間があると、保護者たちを集めて環境保全の理念を話しています。使い捨ての箸や椀、ビニール袋は使わないように、農業用のビニールは水分蒸発を防止する用途はあるが、回収後は適切に始末しないと汚染になること、平均一畝に使うビニールは五キロ程度で、勝手に放置すると千年経っても溶解しないばかりか農作物に影響すること、などを説明していました。

葉が落ちると大地が肥沃になる

二〇一五年八月、慈済大学と慈済科学技術大学の学生はボランティア奉仕隊を組織して、蘭州大学学生及び甘粛の青年ボランティア総計四十五人が、人文交流を目的に劉川小学校に集まって「碧水青山、大愛の家」活動を催し、環境保全体験活動を行いました。

●慈済ボランティアが回収物を身につけ、回収して分類した後、ゴミにならず製品になって、地球にも優しいと説明している。

これを企画したのは慈済大学東洋語学学科の学生の郭馨憶でした。彼女は甘粛に来てからわずか数日ですが、あまりの乾燥に声はかすれ、生活をするには台湾のように湿気のある所が最適で幸せだと言いました。

彼女は子供たちに、心の中に浮かんだ地球を描かせました。ほとんどの子供たちは鮮やかな色を使って描いていましたが、一人だけが黄色に塗りつぶしていたので、どうしてかと聞くと、「僕の住んでいる所はみんな黄色い土ばかりだから」と言ったことが深く心に残りました。

二〇一六年正月、慈済ボランティアは来窯慈済村と白塔慈済村の合同園遊会を催して、生け花、美しい故郷、竹筒歳月、環境保全酵素、ゴミ分類のテントが立ち並んでいました。ボランティアは自分の経験を通して、村人に自分の住んでいる土地を大事にして、隣近所で助け合い協力すること、また慈済は五毛銭の竹筒歳月から善行を始め、今に至っていること、小銭でも志さえあれば善行は困難なことではないと説明していました。

この催しに参加した小学生の劉君は、環境保全のことをもっと詳しく知ることができた、卒業後はよその高校へ行ってもゴミ分類を続けて環境保全に尽くしま

す、と話しました。

「もしも私たちの生活範囲が、自分の世界だけなら平々凡々と暮らし、漠然として人の波の中で消えてなくなります。それは灰になった木の葉のように悲惨で、何の意味があるのでしょうか？　私たちは慈しみの心をもって身の周りの事や物を美化しなければなりません。一個人の愛の心では世界を変えることはできませんが、自分の周りの人に影響を及ぼすことができます」。これは慈済小学校卒業生の雷嘉惟が五年生の時に書いた作文です。

馬耀森先生は彼女に「もしも木の葉がただ焼かれた時、その一生の結末はただそれだけです。でも土の中に埋めると養分になって、小さい木を育てることができます」と話したことがありました。この落ち葉の道理は彼女に深い影響を及ぼしていたのです。

人を変えるには教育が必要です。教育の基礎は小学校や幼稚園にあって、これらは未来の種子です。寒い冬が過ぎると温暖な春の日がやって来て緑が大地によみがえり、家々では次の世代が希望を蒔きます。

【人文風景】

台湾原生魚類の守護者 鍾宸瑞

台湾原生魚類保育協会の創設者の一人である鍾宸瑞は、原生魚の再生飼育を学校から始め、生徒が興味を持って実体験から学んでもらう活動を行っている。絶滅の危機に瀕している魚類を救うことは価値があり、原生魚類が台湾で自由気ままに生息することを期待している。

◎文・汪湘穎（經典雜誌実習生）／訳・済運／攝影・顔松柏（經典 雜誌実習生）

「これはタイワンキンギョ（Macropodus opercularis）で、こちらがタイワンアカハラ（Candidia barbata）です」。図鑑にしか出て来ないような魚の名前が裕民小学校の生徒の口から飛び出す。五年生の林静儀、周芊妤、呉暁芃は水槽で泳ぐ魚を熱意を込めて私に紹介した。魚の名前が分からない時は、すぐに解説板から答を探した。

裕民小学校は全国で初めて「台湾原生魚類生息回廊」を作った学校で、一目見ただけで驚嘆する。四十数種類もの台湾原生魚類は人々を喜ばせ、私たちが見たこともないようなきれいな水槽と美しい神秘的な小魚は、学校の一画を活気ある場所に変えた。

鍾宸瑞は新荘裕民小学校の社会科の教師であると共に、台湾原生魚類保育協会の創設者の一人でもある。二〇〇〇年、台北県農業局は中学校や小学校でタイワンキンギョの飼育促進を図っていた時、もともと熱帯魚の飼育に興味があった鍾宸瑞は同校を代表してタイワンキンギョの飼育に関する勉強を始めた。彼は資料を調べるにつれ、台湾原生魚類に対する知識が少ないことに気づいた。そして、子供時代、内湖地区に住んでいた時、そこはまだ、あまり建設が進んでおらず、周

●鍾宸瑞は「台湾原生魚類天使」部に所属している生徒を一人前の解説員にするよう訓練している（上の写真）。再生飼育に成功した魚種の保存のために学校の生態池に放たれている（右の写真）。

●鍾宸瑞は生徒に原生魚と外来種の違いを詳しく説明している。

りは水田で、水生動物があちこちに見られ、釣り糸を垂らして仲間と遊ぶのが子供時代の最高の時間だったことを思い出した。

しかし、都市の変貌と共に溜め池や湿地は埋め立てられ、家が建つようになった。魚類は鳥や蝶蝶、昆虫と異なり、後者は生息地が一旦破壊された後、適した生息地が再建されれば戻ってくる可能性はあるが、魚類は一旦生息地が消えると存在しなくなる。

異なった二面は両立しない

台湾原生魚類が絶滅の危機に瀕している原因の一つは生息地の破壊である。上流の農業によって土砂が流れ込んだり、農薬で水が汚染されたこと、中流では土手のコンクリート化が進み、元来の湾曲が削られて魚類の生息に必要な水生植物が取り除かれたこと、そして、下流のひどい排水汚染などがある。

魚類の再生飼育は実は簡単なことで、ほとんどの台湾原生魚類は一年ほどで新たにグループ分けできるのだ。「しかし、破壊されるスピードがあまりにも早いため、私が行っていることは再生飼育とは言えず、種の保存に留まっています」と鍾宸瑞は溜め息をついた。

台湾原生魚類は二種類に分けることができる。一つは湿地や溜め池型で、政府による生息地の保存や研究が不足しており、かなり危機的な状況にある。その類いの魚類は寒さや暑さに耐えることができ、一般の学校や地域社会に適している。もう一つは渓流型で、政府が渓流での捕獲を禁止しているため、比較的種の保存ができている。この種の魚は水質の要求度が高く、一般の人が飼育するのは容易ではない。

キクチヒナモロコとニホンメダカ、タイワングリーンバルブは現在、台湾原生種で絶滅に瀕している魚類である。キクチヒナモロコは水田に生息する生物で、生息の危機は人類が水田を埋め立てて別の用途に使うために起っている。ニホンメダカは草食で、卵生だが、日本統治時代にボウフラを退治するために持ち込まれたカダヤシは生息地が重複する上に肉食で、稚魚は生まれた時から餌を探す能力を備えており、ニホンメダカの孵化していない卵を食用にしたため、ニホンメダカは日が経つにつれ、次第に溜め池から姿を消していった。そして、タイワングリーンバルブは外来種の侵入によって生息地がせばまって行った。政府はその三種類を未だ保護種には指定していないが、学者は引き続き研究調査を続けている。保護指定動物に入ることは必ずしも良いこととは言えない。法律の規定で一般の人は近づけないが、皮肉なことに、政府が先頭に立った工事によって生息地が破壊されている。現場には魚類の保護指定をする由を公示するだけで、積極的な行動が見られないため、動物保護団体は別の方法で救うしかない。鍾宸瑞は他の原生魚類が保護動物に指定される前に、できる限り再生飼育された魚を学校の生

●台湾原生魚類は経済的価値が低い上に、見栄えも余りよくないため、重視されて来なかった。キクチヒナモロコ（上）、ニホンメダカ（下）、タイワングリーンバルブ（左）はそれぞれ人為的な要素によって現在絶滅の危機に瀕しているが、未だに政府の生態保護種の動物に指定されていない。

態保護池で飼育するよう急いでいる。

台湾原生魚類保育協会

タイワンキンギョを再生飼育する過程で、鍾宸瑞はインターネットや友人の協力によって多くの有志を募ることができた。二〇一一年、政府の許可を得て、台湾原生魚類保育協会を設立した。

今は主に学校でその生態教育を行っており、台北市中正高校、台北県裕民小学校、桃園市楊梅高校、台中市大雅小学校が台湾原生魚類保育協会が全国で再生飼育している拠点である。将来的にはさらに多くの情熱を持った教師を募り、原生魚類の分布を広めるつもりだ。

活動過程では数多くの人が自主的に協力を申し出たが、一時的な興味や話を聞いただけでやって来た人などが混じっていた。鍾宸瑞は初めは疑うことを知らず、相手も同じ志を持った魚類保護を目指す人だろうと思い、再生飼育している場所や魚の種類を教えてしまった。しかし、結果は予想に反して、教えた飼育場所が無惨に破壊されていた。それ以降、情報を漏らさなくなった。

「そういう状況に遭遇するのも仕方ありません。魚類の飼育には時間や気力、またはお金をかけなければならず、さまざまな要因で多くの人が途中で止めて行きました」と鍾宸瑞が説明した。「ですから情熱があることが一番肝心なのです」

桃園県大溪にある豆腐店「傳貴」のオーナー、王美玲は鍾宸瑞と長年の知り合いで、彼の苦労をよく知っている。「飼育にこんなに時間をかけたら、奥さんや子供と一緒に過ごす時間がないんじゃないですかと鍾先生に聞いたことがあります。彼は『当然ですよ。家内はすんでの所で離婚協議書を差し出すところでしたよ』と冗談を言いました。ですから家族の応援が大切なのです」と彼女が言った。

台湾原生魚類保育協会の構成員はさまざまな分野の人で構成されている。「魚を保護しようとする気持ちは皆一緒ですが、考え方が異なることもあり、顔を真っ赤にして言い争う時もあります。全てはよく話し合うことです」

台湾が地理的に分離されているため、固有の種は四十以上に及び、研究が進むにつれ増えて行く可能性がある。しかし、自然環境の中に生息する「外来優勢種」または「外来闖入種」も既に四十種類以上登録されている。カダヤシやカワスズメはよく台湾原生魚類に間違えられる。

このほか、北部、中部、南部、東部に

●裕民小学校の壁には卒業生の作品がいっぱい貼られ、通る人の目を楽しませてくれる。それは学校の美化だけでなく、原生魚類を人間の生活に融け込ませている。生態保護の知識と他の領域を結合させたことが教育上の一大特色となっている。

それぞれ異なった原生魚類が分布していたが、人為的なミスで南部にしかなかった原生魚類が北部で見つかっている。西部を例にとると、台東と高雄の川の上流にしか存在しなかった地域性の強いワダカチとアロワナカープが台湾の中部と北部の川で見つかり、それも種の群を作っていた。それらは台湾の原生魚類であるのに、出現すべきでない生息地で見つかっており、そこの原生種の生息空間を圧迫しているため、「台湾原生外来種」と呼ばれる。

野外調査は風の便りと昔ながらの方法に依るしかない。それは原生魚に関する文献や研究が少ないため、高山の森林地帯から低地の溜め池まで、また、騒々しい人間の世界から人里離れた荒野まで、少しでも噂を耳に挟めば、協会の会員は即座にその場所に向かう。以前、不慣れな場所で池に落ちた人もおり、こういう活動もある程度の危険を伴う。「他の人は私たちは馬鹿の集まりだと言いますが、私は魚を救えないことだけが心配なのです」と鍾宸瑞が肩をすくめて言った。

絶滅寸前の台湾原生魚類

「ニホンメダカの例を言えば、三、四年かかってやっと見つけましたが、本当に大変でした。丸一日かけても何の手掛かりもないのが常でした」。やっとのことで伝説の原生魚が見つかり、心の重しが取れた。飼育初期、安心して生息地を離れたが、しばらくして調査に戻ってみると、状況は九十九パーセント変わっていた。「生息地が破壊されたり外来種が入ったりして、原生魚は当然のことながら消

えていました」と鍾宸瑞は悲しげに言った。無惨な失敗を経験してから、彼はまず緻密に付近の環境の優劣を調査すると共に種を保護する作業を行った。別の生息に相応しい場所が見つかった時に初めて魚類を野生に帰した。しかし、それでも問題が次から次へと起こった。

永久に安全な土地を探すのは容易なことではない。原生魚が暮らせる場所を与えるために、鍾宸瑞は自分の職場から始め、新北市教師研修系統を使って原生魚研修活動を公表した。これにより、学校やテレビ局から要請されて教育の普及活動になり、無駄にはなっていない。

鍾宸瑞と協会の努力で、桃園大溪で豆腐を販売している詹文炯は再生飼育と普及活動に加わった。六年前、協会と一緒に池を自然の生息地に変え、今ではほとんど人工的に保護する必要がなくなった。来訪者を迎えるのが好きな彼は私たちを連れて参観した。「ここでは飼料を与えることはありません。同時に水草を植えて昆虫を引き寄せるのは自然に食物連鎖を作り出すためです。異なった魚類には異なった役目があり、自然に清掃してくれます」

生態池は雑多の中に秩序がある状態で、自然界の美の神秘が現れている。「参観に来る人の多くは宗教団体で、人工の池をどうやって自然の生態

●鍾宸瑞と陳華傑は共同で5年の間に学校の生態池を原生魚が生存できる環境に変えたが、そこが生態保護と教育の場となることに期待している。

池にしたのかを理解しようとするほか、協会が研修会を開いたり、鍾先生が課外授業に生徒を連れて来たりします。私はどれも喜んで場所を提供し、自ら解説員となって魚類の生態系での役割を教えています」と詹文炯さんが言った。「食物連鎖の断絶は一種の警告ですが、種の再生飼育によって環境はもっと良くなります」

原生魚に自由に泳ぎ回らせる

台灣原生魚類保育協会の常務監事陳勝華は地域での原生魚類教育の普及活動をしているが、魚の飼育するのは余暇になるだけでなく、地域社会の住民の感情を育むと思っている。また、人類の知識には限りがあり、一生かけても学習しきれない。「生態を理解することは謙遜を学ぶことができる」とも思っている。

地域に普及させる教育を始めるに当たって、住民に負担をかけないとの原則の下に、魚と飼料の提供や無料の飼育法の講義は全て自腹を切って行っている。一般大衆が知らず知らずのうちに生活の一部にすることを期待しているが、人々の情熱が持続するかどうかが一番の問題である。

このほか、資金不足が常に頭の痛い問題である。「しかし、やり続けるしかありません」と鍾宸瑞は当然のことのように言った。毅然として動揺しない精神を彼の体から感じ取ると共に、政府が宣伝を増やして多くの人の力を集結することにも期待している。「私たちだけでは足りません。若い人が参加し、お金があればお金を出し、力があれば力を出してくれれば、長続きします」

「台湾で生活している以上、台湾に関する知識を持つべきです。もし、図鑑で写真を見るだけなら、それはとても悲しいことです」。鍾宸瑞は人々を教育する時、食用にできるのかどうかを一番よく質問されたことを思い出した。「魚類は人間に食べられる以外にも意義のある存在なのだということを大衆に教育すべきです」と話す。十枚の外来種の写真を見せると、人々は七、八種を見分けることができるが、原生魚はタイワンキンギョと最も有名なタイワンマス以外はほとんど知らない。

『外来』をなくして、『原生』に戻す」ことが鍾宸瑞の一貫した理念で、原生魚が台湾で悠々と泳ぎ回ることが彼の究極の目標である。

●教育は希望であり、一つの課程が終わった後に生徒に注意深く観察する機会を与えている。生徒たちははしゃいで袋に入ったタイワンキンギョを高々と上げた。生態保護の種子は既に幼い心に芽生えている。

魚は環境保護の起点に過ぎない

その日は雨がしとしと降り続き、気温は二十五度前後だったが、魚類が活動するには最適だった。鍾宸瑞は再生飼育に成功した原生魚を中正高校に運び、校内の生態池に放流して魚の新しい住処にするつもりである。

私たちの到着を待っていた陳華傑は中正高校の物理の教師であると共に、その拠点の責任者でもある。彼は学校に八人のチームを作っているが、国語の先生や化学、物理の先生もいる。「魚を教育と結びつけると、異なった科目が魚と密接な関係にあることが分ってくるし、科目に繋がりができることで、独り歩きすることがなくなるのです」と陳華傑が言った。

二〇一〇年、学校は元来の貯水池を原生魚が生存できる環境を備えた模擬生態池に作り替えた。二〇一五年九月には学校は魚類飼育場を作り、「原生種の再生」という選択科目を導入した。内容は原生魚類の他、蛍と蝶蝶の再生飼育も含まれている。

「生態保護、再生飼育、教育」が学校で台湾原生魚類教育を進めて行く上での目標である。鍾宸瑞教師にとって、「生態保護」とは生息地を破壊しないことであり、「再生飼育」は仕方なしに取る最後の手段である。そして、「教育」は大衆に正しい生態保護の観念を持ってもらうことであり、学校の教育に始まって、自ら生態保護活動に参加し、最終的には魚を自然環境に帰すことである。「学校はノアの箱船であり、宣伝促進を通して魚を台湾の自然に帰すことなのです」

減災希望プロジェクト

屏東の五校が使用開始

台湾では学校校舎の老朽化問題が指摘されて久しい。危険建築物に指定されていながらいまだに使われている校舎もあり、政府と民間団体は協力して改築を急いでいる。慈済は二十一の学校で「減災希望プロジェクト」を進めており、第一陣となる屏東の五校が今年三月に使用開始された。地震など自然災害の頻度が増している現在、減災、防災は教師や生徒にとって安全を確保する砦である。

◎文・黄秀花、楊舜斌／訳・黒川由希／撮影・顔霖沼

一九九九年の台湾中部大地震によって、三百校近くの学校が倒壊などの被害を受け、学校の安全が大きく脅かされた。さらに二〇一六年二月六日に発生した台湾南部地震は、老朽化した校舎に再び大きな脅威を与え、被災した学校は約四百八十一校、被害総額は二億七千万元（一元は約三・四円）にのぼった。そのうち台南の被害額が一億五千万元でトップ、屏東県がこれに次いで七千万元であった。

台湾地震模型組織委員会が二〇一五年に発表した「今後三十年の台湾地震発生帯の地震発生確率図」によると、台湾全土の断層の中で地震の発生確率が最も高いのは台湾南部、次いで台湾東部であった。

台湾東部の宜蘭、花蓮、台東地域は頻繁な小規模地震でエネルギーを放出しているものの、美崙断層と鹿野断層という活断層によって、マグニチュード七以上の大規模地震の起こる可能性は二十％にのぼり、台湾でトップである。

教育部は二〇〇九年より「小中学校老朽校舎及び関連設備の補強改築スピードアップ計画」を始動し、関連機関に全国の小中学校の検査を委託、また毎年数十億元を投入して、耐震基準に満たない校舎への補強または改築を行っている。だが、当時改善が必要と認定された八千棟以上の校舎のうち、七年が経過した現在でもなお五千棟以上の校舎への経費が行き渡っておらず、首都台北でさえ補強の終了していない校舎があり、資金不足の他の都市については言うまでもない。

校舎の老朽化問題が指摘されて久しいにもかかわらずなおも使用され、補強や改築が進まない原因は、歴史的な経緯と中央及び地方政府の財源不足にある。

台湾では一九六八年より九年間の義務教育が実施され、多くの教室が必要となった。当時建設された校舎は、ほとんどが波形スレート屋根に柱のない廊下という画一的なものだった。その後、財源に限りがある中で各地が新校舎の増築を行ったが、多くが旧来の構造に新たな構造を接ぎ合わせたもので、耐震性が低く、年月の経過によって危険性が増している。

台湾中部大地震後に慈済が援助した五十一校の希望プロジェクトでは、将来の無理な建て増しを防ぐため全てに勾配屋根を用い、また鉄骨鉄筋コンクリート構造（ＳＲＣ構造）を用いた。二〇〇九年、モラコット台風（台風第八号）が台湾南部及び東部を襲い、屏東では県全域にわたって被害が出た。慈済は台南、高雄、

屏東で恒久家屋を建設したが、そのプロジェクトが一段落を告げると、二〇一四年から関連機関と屏東、高雄、台東、花蓮の計二十一カ所の学校で校舎のリニューアルに着手した。その第一陣となる屏東の五校で工事が終了し、二〇一六年三月十二日、使用開始の合同式典が行われた。

補助を待つ老朽化した校舎

屏東県長を辞職して一年あまりになる曹啓鴻は、老朽化した教室の問題は指摘されて久しく、監察院からもたびたび改善命令を受けたが、県政府の財政には限りがあり、改築や修築のスピードアップは難しかったと語る。「地震がなければいいのですが、ひとたび地震が起きればすぐに問題が発生するでしょう」。二〇一二年、曹前県長が證厳法師とモラコット台風災害復興事業について会談を行った際、老朽化した教室についてその懸念を語った。

これより以前、證厳法師は屏東慈済委員から、子どもたちの学び舎の安全性への危惧について話を聞いていた。二〇一三年より、慈済基金会はモラコット台風被災地の学校被害について調査を

人口、面積比率によれば屏東に配分される額は少なく、財政は逼迫し、毎年の予算は十億元に満たない。「しかし教育費は減らすわけにはいきません。これは政府の義務であり、必ず支出すべきものです。ただその額が十分だとは言えません」と曹前県長は言う。

老朽化した校舎の改築については、年々改善できるよう、中央政府で特別予

●3月12日、校長5名と来賓が公正中学校事務棟前で行われた開幕式典に出席した。屏東減災希望プロジェクトの援助した5校が正式に落成し、使用が開始されたことを意味する。

算が組まれている。教育部が七年前に提起した額は二百億元であるが、昨年末までの補修経費は毎年平均二十億元にすぎない。解体、新築の経費は、行政院の一般教育補助金によって賄われるが、毎年三十億元あまりというその額では、各県市の年間平均配分額は一億三千万元に過ぎないということになる。

「この分配額によるなら、屏東県では一年に三校の修築しか行えず、その三校以外は順番を待つほかありません。では、例えばもし十年順番待ちをしている間に、いかなる災害も起きないと保証できるのでしょうか」。こう強調する曹前県長は、県政府のこうした懸念を解決し、何より教師や生徒、保護者たちに安心を与えるため、慈済が大きな支援を行ってくれたことに感謝する。

民間団体がハード、ソフト両面を援助

慈済が援助した屏東の五校は、いずれも県政府が優先的に緊急に修築する必要があると認定した学校だった。さらに援助を待つ十二校のうち、修築の度合いが最も大きく、全体的な整合性も考慮しなければならない学校の援助を慈済が引き

減災希望プロジェクト・前の屏東の五校

里港中学校

公正中学校

高泰中学校

内埔中学校

枋寮中学校

受けてくれたことを曹前県長は称賛する。

「慈済は費用と面積が最も大きい校舎を引き受けてくれました。その他の学校については、ほかの協力組織を捜し、鉄筋コンクリート用棒鋼を追加したり、補強したりといった修繕は、県政府が自ら処理しました」。曹前県長は慈済の援助に感謝し、またエバーグリーン・グループ、AUO（友達光電）、家扶中心、赤十字社、ワールドビジョン、玉山銀行、ロータリークラブなどの民間団体や基金会の、ハード、ソフト両面での賛助にも感謝している。

慈済の修築援助評価項目が非常に綿密であったことも曹前県長は認める。慈済は学校側と評価について話し合い、最も必要なところへ向けて援助を行った。例えば校舎が損壊したものの、生徒数が減少し別の校舎の教室に収容できるといった学校は援助リストから除外した。一方慈済の援助した五校は、それぞれ深刻な問題を抱えていた。例えば高泰中学校では、建て増しで階数を増やしてきたため、柱が大きくずれており、梁、板、壁のいずれも大きく湾曲し、せん断やひび割れを起こしていた。また里港中学の一部の校舎は長年修築が行われず、耐震性に問題があった。内埔中学では大木が建物の構造の安全に影響を及ぼしており、一階の天井には木の根が露出し、二階では机や椅子を真っ直ぐに並べられない状態だった。

「慈済は安全な校舎を建てるという点だけでなく、学校全体の発展や子どもたちの要望にも配慮していました。こうした周到な計画に一番感銘を受けましたね」。当初慈済スタッフと共に各校を回り、現場調査を行った屏東県前国民教育課長で現体育保健課長の李達平はこう話す。

「例えば高樹郷高泰中学の野球チームと技芸サークルは、当時評価を行っていた江子超慈済建築委員が感銘を受け、遠路はるばるそこに通ってくる原住民族やチームの子どもたちのためにと宿舎一棟を増築するよう提案しました。また里港郷里港中学のボクシング教室は当初計画の中に入っていませんでしたが、慈済はニーズに対応するため技撃館を増築しました。慈済は学校はただ勉強するためだけの場所ではない、子どもたちに希望を与え、より多くのチャンスを与える場所でなくてはならないと考えているのです」と李課長は話す。

高泰中学校はもともと十二教室を改築

●再建後の公正中学の新校舎は、口の字型で、見通しがよく、教師や生徒たちが建物の間を行き来するにもより便利になった。

する予定だったが、後に実際のニーズと将来的な見通しを考慮して改築する教室を二十二教室に増やした。公正中学は当初の再建予定が校舎二棟だったところを四棟再建した。そのほかの学校も多少なりとも計画に上乗せするところがあり、援助額は二、三億元から五億元近くにまでふくれ上がり、県の見積もりをはるかに上回った。李課長は、「曽県長にそのことを話すと、大風呂敷を広げるなと言われました」と言う。

慈済が普通教室のみならず、生徒たちの多元的な成長に役立てるため、武道館や専科特別教室などの再建にも援助を行ったことについても、李課長は思いやりある措置だと感じた。「教育という観点からいえば、全ての子どもたちが平等に教育を受ける権利を持っているのですが、実際に公平を実現するのは大変に難しいものです。しかし辺境の学校であっても、子どもたちにチャンスと良い環境を与える努力をしさえすれば、強みを作り出すことができます。スポーツや技芸などいろいろなコンテストで子どもたちが達成感を得ることができれば、子どもたちにさまざまな未来の可能性をもたらすことができるでしょう！」。李課長はこう述べる。

辺境の教育に新たな活力を注ぎ込む

再建援助の確定後、教育部、県政府、慈済の三者は話し合いを経て契約式典を終えたが、県政府はそれに続いて学校の敷地をめぐる所有権問題に取り組まなければならなかった。

一部の学校が建つ土地は、昔その土地のお年寄りたちが好意で提供してくれた

ものだ。しかし不動産登記をしておらず、学校の土地として登記するのは簡単ではなかった、と曹前県長は指摘する。「以前は法律に不備があり、またそれぞれが適当に事を行っていました。公有地であれば建ててしまえばそれでいいというわけです。ですが再建するという時になって、建築許可も使用認可も受けていないことが分かった、ということがたびたびありました。もし私有地を占有していることが分かれば、問題はもっと面倒になります。これらはみな、県政府が時間をかけて話し合い、処理しなければならない問題でした。でも慈済の援助に比べればどうということはありませんよ」と曹前県長は話す。

二〇一三年にデザインと審査、その翌年に契約、財産権の合法化をすますと、建設の前には学業に支障が出ないようにと仮設教室も建てた。二〇一四年十月、いよいよ五校がそろって建設工事を始めることになった。この過程の歩みは迅速だったと言えるだろう。しかし慈済はさらにその足取りを速め、一年あまりの建設期間を経て、昨年末竣工、今年三月より五校の教師、生徒たちが次々に新校舎の使用を開始した。

「慈済は建設に対してとても念入りで、

●ボクシングのトレーニングは忍耐力と辛抱強さを養う。コーチの指導で子どもたちは好成績を挙げた。里港中学でまもなくオープンする技撃館（上の写真）は、慈済が建設援助の際に、子どもたちが安全にボクシングや柔道を練習できるようにと設置した。

資材、工法、工程から建築業者まで、どれも一流のものを選びました。ですから出来ばえはどれも素晴らしいものでした」。自分の任期中には完成しなかったが、それでも曹前県長は興奮気味にこう話す。

「この五校の子どもたちが、真新しい教室と宿舎を使っているのを見ると安堵します。政府の経費投入を待っていたら、いつになるか分かったものではありませんでしたから」

構造を補強し天災に対応

「ひさし、勾配屋根、廊下、バルコニー、どれも掃除に便利で、水はけがよく、通気性や採光性にも優れています」。修築工事監督を請け負った慈済基金会建設処南部建設室主任の林守義は、これは一貫して慈済の校舎建設の基本原則だと強調する。

この一年あまりの建設期間中、林守義は五校を駆け回り、工事の進捗度を監督しており、感慨はひとしおだった。とくに台湾南部地震の際、震央の美濃から遠くない屏東にあって、無事に地震に耐えられたことに、彼はほっと胸をなでおろした。

しかし林守義は自信も持っている。

「我々の建てた校舎の階数はどれも高いものではありません。鉄筋コンクリート構造の耐震強度はマグニチュード七以上です」。鍵となるのは柱と梁のせん断補強鉄筋で、それらがしっかりと固定されてこそ堅牢さと強度を高め、地震発生時の損壊を防ぐことができる。鉄筋は人の骨格、コンクリートは筋肉のようなものだと林守義は譬える。一つは引張り強度、一つは圧縮強度を補強し、両者があいまっ

●枋寮高校の寮生たちは、慈済のボランティアとともに宿舎へ通じる道にレンガを敷いた。自らの労力を出せば、入居後より一層愛着が湧く。

●枋寮高校の新しい宿舎はグラウンドと海を見下ろせる。都市の喧騒を離れた単純な景色のこの場所から、生徒たちは未来を創造する。

てはじめて強大な外力への抵抗力が生まれる。

建設業者も慈済の品質に対する要求を理解しているため、おざなりにはしなかった。林守義は言う。「私たちの共通の願いは、百年希望プロジェクトを進め、何世代もの子どもたちに安全に安心して使用してもらうことです。もちろん頑丈であってこそ、不安を取り除くことができます」

三月十二日、台湾南部の温かな陽光の下、慈済が建設援助した屏東の五校の減災希望プロジェクト学校が正式に使用開始された。祝賀式典では各校がそれぞれ出し物を披露し、彩を添えた。

里港中学校吹奏楽部は「Stone Creek Episode」（ストーン・クリーク・エピソード）を、軽快に朗らかに演奏した。公正中学の「小情歌」のウクレレ伴奏と合唱では、男子生徒の繊細な歌声が鳴り響いた。内埔中学校のサンバ組曲では打楽器が打ち鳴らされ、バチを振るう姿も勇ましかった。枋寮高校の「雨中漫舞」（雨の中のスローダンス）では女子生徒たちがタイ族に扮し、しなやかで楚々とした舞い姿が、見る者を惹きつけた。そして高泰中学校縦笛隊の吹奏した「剣舞」は、県大会七連覇の名に恥じない優美で感動的だった。

一年あまりの建設期間中、幾度もの困難に直面した。しかし五校の子どもたちの青春真っ只中のはつらつと自信に満ち溢れた表情を見ると、全ての苦労が報われたことを実感する。都市と農村の生徒たちに格差が生まれないよう、辺境の教育環境には関心を払う必要がある。誰かのために少しの力を差し出すことで、事態を変えることができるのだ。

【證厳法師のお諭し】

◎訳・慈願／絵・林淑女

善の力が合わさりこの世に福をもたらした

自分一人では力不足だと思わず
尽力して奉仕し
他人にも奉仕を勧めることである
人々の善の力が合わされば
艱難なこの世に
平坦な道を敷くことができる

今年の四月三十日は、旧暦の三月二十四日にあたり、慈済（ツーチー）が創立してから満五十年目になります。そして五月一日から、新たに五十一年目に向かって邁進してまいります。世界中にいる慈済人は、一団また一団と静思精舎へ帰ってきて、隊伍を組み、念仏を唱えながら三歩歩いて跪き一礼する荘厳な朝山（お参り）をしています。たとえ風雨の中であっても慰懐に一歩一歩、精舎まで天下の平安を祈りながら前進しています。

五十年来慈済人は、清浄と真心をもって奉仕してきました。艱難な試練にあっても堅い菩薩の情を抱いて、愛を広く世

界に及ぼしてきました。

今の世の中に目を向けると、天災が頻繁に起こっており、仏陀の言われた「この世は無常、国土は脆く危うい」が実証されています。私たちはさらに口では良い話を、身では良いことを行い、心では良いことを思って、天地間に善の循環ができるように発心立願することです。

人の心は大地の生態に影響します。人心の調和とは、人と人との間で互いに信じ融合し、愛の倫理道徳を建立して励まし合うことです。そうであってこそ社会は平和になり、天地間の気候が順調になれば災難が少なくなります。

煩悩に覆われると
無明は重くなる
酔いと愚昧に
真実は見極められない
迷いの人生は無量の業を造る

《法華経・五百弟子受記品》の中に記載されている五百比丘受記後に、以前に仏法を信じていても、完全に仏心を体得できなかったことに懺悔し、ただ己の生死のみを思い、信心、気力と勇気がなかったため、衆生に済度することができなかったとあります。

「例えばある人が、親友の家で酔いつぶれ寝てしまった時、親友は官職があって出かけなければならないので、価値のある宝石を寝ている親友の懐に入れて出かけました。酔いから覚めるとそんなことも知らずに出かけ、他国へたどり着きましたが、衣食のため非常な努力をしていても、所得は少なく生活するに足りませんでした」

五百比丘の中で例えていることとは、貧しい人が親友の家へ行って酔いつぶれ、親友は落ちぶれた友を見て、その懐に宝石を入れました。この宝石は貧しい人にとって使い果たせないほど貴重な物ですが、彼は露知らず、貧しい流浪の生活を続けていました。

仏教はこの例えをもって、善とはただ自分だけの善であってはならないと教えているのです。心、仏、衆生の三つに区別はありません。人々の身にはみな貴い宝、すなわち真如の宝が具わっているということです。しかしながら重ね重ねの煩悩に覆われていると、悟ることができずに、無明の酒に酔い潰れ、夢遊病のように生涯をぼんやりと過ごしてしまいます。酔い潰れた人生は真偽が見分けられず、酒、色、財、気、名利、地位を最も重要視し、絶えず追い求めて身、口、意の業を造ってしまいます。

古より人類は山を掘っては鉱石を採掘し、加工して高価な宝石とします。宝石は人に虚栄心、身分を見せびらかし、その心は空虚な満足感に過ぎません。心の中に貪、瞋、意が常にあると自在になれず、五里霧中の中で業を造ってしまいます。

人生でもしも自分の身だけ考えていると、どんなに多くの物を持っていても満足できず永遠に追い求めることは辛いものです。短い人生においては、広い愛の心をもって、大願を立てて人々に奉仕すると、無量の法悦が得られ、心霊は永遠に満たされます。

仏陀の《四十二章経》の中で「賭人施道、助之歓喜、得福甚大」とあります。弟子が「この福は尽きますか？」と聞きました。そして、「また他人に善行を勧めたら自分の功徳は少なくなりますか？」と。仏陀はそれを蝋燭に喩えて、一本の蝋燭で千本もの蝋燭に次々に点火しても自分の蝋燭の光りは矢張り明るいものだと説明されました。

布施や法を伝える福の報いもこの通りで、仏法を信じる者だけがその懐にある宝珠でその身を照らすのでなく、そのあかりは暗闇の隅々まで照らさなければなりません。人々が法の明理を得て、互いに照らし合うと、この世に大きな光りを放つことができます。

人には奉仕の能力が具わっています。「私にはそんな力などないのに、どうして人の手助けができるの？」と思わずに、持っている力で奉仕し、さらに他人に奉仕を勧めるのです。人々の善の力を集めて、苦難の世に菩提の大愛、悟りの道を敷きましょう。そうすれば福徳は無量無辺に得られます。

無常の人生の中で夢幻は泡の如く
露の如き電の如く雲煙と散りゆく
その身は所有権はなく使用権のみ

仏典の中にあるお話です。

ある国の王が可愛い王女のために美しい花園を造りました。王女は高台に立って花園を眺めている時、水の流れに太陽があたって七色の美しい水玉になっているのを見て大変喜んで、父王にあの美しい玉が欲しいとねだりました。

王はそんなことはできないと知りながらも、可愛い娘のために、七日以内に七色の水玉を取ってくるように命令しました。大臣はお触れを出し、七色の水玉を取る人を募りました。

あるよそからきた賢者が、人々ができもしないお触れに悩んでいるのを見て、

私が王女の要求を叶えてあげましょうと言いました。そして王宮へ行って王女に網を差し上げ、ご自分で一番美しいと思う水玉を掬い上げるようお勧めしました。賢者は「水は高い所から流れる時に七色の泡を形成します。もしも王女様が、これが水か玉か分かりましたら、私も取ることができます」

王女は網で水玉を掬い上げますがすぐに壊れました。何度も掬っているうち、水ということが分かりました。賢者は「人生も絶えず流れる水が水玉を形成するように、幻と化す無常なものです」と言いました。

王女はそれを聞いて悟り、それから賢者を師と仰いで、後に国を司る賢明な王女になりました。

※

人生は露か電気のように真であるかどうかと思う必要はありません。世の中のすべてのことは目の前から過ぎ去ると雲か煙と消え、自分の体さえもただ使用権があるのみで所有権はありません。人生の中では自分の一念をよく護ることです。もしも迷えば、酒に酔ったように是非も見分けられずに悪業を造って不安な人生を送ることになります。

一念の偏りは、この世に禍をもたらします。一念が善に向くとこの世に造福しますから度量を大きく持って、是非の分別を明らかにし、正しいことは真面目にやればいいのです。

慈悲心を以て
万物をいたわり惜しみ
善念を啓発して
善の力を発揮し
大愛を広く広げて
造福を無量に

この四月、世界のあちこちで地震が頻繁に発生しました。ミャンマーに次いでアフガニスタンの後、環太平洋地域では日本、エクアドルとトンガ王国で続けざまに地震が発生していました。中でも日本の熊本と南米のエクアドルは浅層地震で深刻な災害でした。

頻繁に伝わってくる強い地震の消息に心配させられます。しかし心配しても何の役にも立たず、懺悔が必要です。人類の無明によって土地が絶えず開発のために破壊され、地球は傷つき、さらに地質を脆弱にさせ振動に耐えられなくなっています。その大地をいたわり護ら

ねばなりません。

慈済は二十年前から環境保全を推進してきました。歳月は人々を老いに押しやり、多くのボランティアは中年から老年に至っても、無私の愛を以て大地が平安になるよう守っています。老いにしたがって身体の退化は免れられませんが、たとえ腰が曲がっても、資源を再利用しわずかでも大地を破壊から守ろうという単純な心を堅持しています。

極端な変遷気候は人類の生存を威嚇しています。科学者は二〇二五年、すなわち九年後には、世界の八十億人口の中、十八億の人が水不足の危機に襲われると予測しています。

今年猛威をふるったエルニーニョ現象で、いくつかの国々が干ばつのため食糧不足で生存危機に陥り、アフリカのマダガスカルでは百十四万人が飢餓の苦しみに遭っています。

私たちは幸いにも豊かな国で安定した生活を送っていますが、古人が「晴天には雨天に備えて食糧を蓄える」と言っているように、福を大切にして大地の資源を守らねばなりません。

昨年の七月から八月にかけてミャンマーで水害が発生し、収穫前の稲が水に流されてしまいました。この人たちは種

籾を他人から借りて田植えをし、収穫した後に返すということでした。ですが、この災難で返すことができなくなったばかりか、日々食するお米にも事欠き、さらに今度の種籾はどうなるのでしょう？

貧農たちの災難を救うため、ミャンマーの慈済ボランティアは種籾の配付を始めました。予定では五月までに一万人の農民に行き渡ります。配付の時慈済人は農民たちの中に入って「善の種をまきましょう」と愛の心を啓発していました。

ヤンゴンのタイチー郡、レーナーゴン村の農民、ウ・ゼン・ディンは昨年慈済から種をもらった時、慈済の「竹筒歳月」の縁起とは、小銭を集めて大善を行っていることを知りました。そして五十年来慈善の足跡は九十あまりの国々に及んでいることも。彼はその精神を学ぶことに決めて、毎食のご飯を炊く時、一握りの米を甕に入れて「貯金」し、貧しい人を助けています。

ウ・ゼン・ディンは慈済のボランティアになる志を立て、訓練に参加して暇があると家々に「米貯金」を奨励しています。戸も家具もない貧しい夫婦は日雇い暮らしですが、ウ・ゼン・ディンから竹

筒をもらって、自分より貧しい人を助けたいと言いました。

「一粒の米も一籠に、一滴の水が大河になる」。この例えの通り、一回目の「米貯金」では九十六キロの米が集まり、百五十六人に一日の必要量を提供することができました。

これが愛のエネルギーです。この愛の力は、助けを受ける人から言えば社会大衆の関心を得て苦痛が和らぎましたが、助ける側の人は、心に愛が満ちて豊かになり、煩悩も少なくなって無量の法悦が得られたと言います。

●

《出曜経》に記載されている仏陀が摩竭陀国におられた時のお話しです。

猟師たちが森の中で罠をしかけていました。ある日一匹の鹿が罠にかかり、猟師たちは遠くから聞こえてくる鳴き声を聞いて、争って罠にかかった鹿を探しました。しかし、あまりにも多く罠をしかけたため、自分たちがはまって、鹿を探せられないばかりか命を落とす者や重傷を負う者が出ました。

一人の猟師は傷の痛みをこらえ精舎へ行って、仏にこれから一切衆生を殺傷しませんと懺悔をしました。仏の偈語は「猶如自造箭、還自傷其身。内箭亦如是、愛箭傷衆生。（自分の造った箭で自分を傷つけ、内なる箭もまたは衆生に傷を負わせる）」とあります。

人生の苦難は、自分の心の貪瞋痴によります。欲念はこの箭のように、自分が造った落とし穴にはまって、衆生を傷つけるだけでなく自分も傷つくということです。

ただ自分だけの利益を求めていると、落とし穴に踏み込むことは免れられません。無明の流転は真夜中の暗闇のように前方がはっきりと見えず、知らず知らずのうちに深く沈み込んで、実に危険です。

平和で穏やかな社会は人心の浄化によります。しかし人心の浄化を口で言うのは容易なことでしょうか。仏陀は《法華経》の中で人々は、自分だけの独善を行うのでなく、人々の中に入って愛を発揮するよう励まされております。

皆さんが発心立願し、広い心で愛を以て、厳しいこの世に平らな道に敷くように願い、また精進を期待しています。

大地の守護者

慈済青年ボランティア奮闘記

◎文・蔡瑜璇、黄筱哲／訳・黒川章子／撮影・黄筱哲

元宵節は華人といわれる中華文化圏の人々にとって大切な伝統行事です。旧暦の一月十五日という春節を迎えて最初の満月の日の夜、すべての新しい始まりを象徴して大地が春を迎えたことを祝う祭りなのです。各地で趣向を凝らした祭典が開催されますが、その中でも代表的なものは「台湾ランタン祭り」と呼ばれています。今年は桃園市が主催しました。会

場の面積は三十二平方メートルにも及び、合計千組以上のランタンが飾られ、その数は歴代最多と記録されました。折しも二二八記念日の連休にあたり、一層多くの観光客を惹き付けることとなりました。色鮮やかなランタンは、明かりが灯ると夜に瞬いて輝き、それはそれは盛大なイルミネーションとして祭りを彩りました。

　そのランタン祭りの会場で、とある若者のグループが練り歩く姿を見かけました。高らかにＬＥＤ灯のついたプラカードを掲げ、青いポロシャツに白いズボンという姿、顔には満面の笑みをたたえ、口々にスローガンを唱えています。「ランタン祭りで環境保全！　街をきれいにしましょう！」と。桃園新竹地区の大学専門学校にある慈青社（慈済青年ボランティアクラブ）で構成されたボランティアの若者達でした。環境保全の信念を胸に、休日を利用して祭りの会場を訪れ、人々に清潔な町づくりとその環境維持を呼びかけていたのです。

慈済青年ボランティアの創意工夫溢れる宣伝活動

　人々の注目を集め、一方で参観者の楽しみを損なわないようにと、彼ら慈済青年ボランティアは工夫を凝らしてユーモアのある呼びかけをしていました。例えば人間の破棄したビニール袋が頭にかぶさって苦しむカモメに扮しＳＯＳを発信します。「おーい、僕はカモメの子だよ、ビニールがひっかかって苦しいんだ、誰か助けてく

れないかい？」。すると、心優しい子供達がすぐに駆け寄ってきました。この時を逃さず、待機していたボランティア達が続いて呼びかけるのです。「一緒に三つの問題を解こう！　第一問、おうちの人と外で食事をする時、割り箸と自前の食器とどっちを使う方がいい？」という具合です。

別のボランティアは大愛感恩科技社のマスコットである犬の「大愛」と猫の「感恩」に扮装して、行き交う人々の歓迎を受けては一緒に写真に写っていました。そして写真をフェイスブックにアップし、会場にチェックインして環境保全の標語を書き込んでくれた人にはエコバッグをプレゼントするのです。それはボランティア達が回収した古紙を使って手作りしたバッグでした。科学技術で上手に宣伝するだけでなく、再利用までも体感できるという創意工夫が見て取れますね。

これらの着ぐるみを着ていたのは万能科技大学の周碩佑君と開南大学の周佳妮さんです。二人は顔を真っ赤にして背中は汗だくになりながらも、この宣伝活動に参加できた喜びを語ってくれました。会場の人の流れや当日の天候などを考え、アイディアを出し合い、協力し合って進めたそうで、この活動を成功させることができ

たのは、仲間のボランティア達のおかげだったと心から感謝していました。

若い世代の使命

大勢の人が集まると大量のゴミも出現するのは当たり前ですが、会場を見回してみると、しかしゴミが落ちていないのです。これはランタンの素晴らしさにも勝る驚きでした。桃園市は会場の清潔維持を重視して各種の資源回収ボックスを集中的に設置し、多くの清掃員を動員して会場を絶えず見回ることにしたそうです。そして慈

済青年ボランティアにも協力を要請したのだそうです。お互いの努力が実って「ゴミのおちていない祭り」が成功しました。このように政府機関にもエコ意識があるということが分かりましたし、人々にも環境保全に対する意識と教養が高まっているのが見えて大変喜ばしく思いました。

今回の活動の代表者は中原大学の学生、楊佩錡さんですが、最初はスローガンもすらすら言えず、うまく出来なかったそうです。彼女は内湖のリサイクルステーションで実際にボランティアに参加し、現場の人々と苦労を共にした経験を仲間と分かち合いました。ボランティアの負担を軽くするためには「清潔は源から」という考えがとても重要であること、分類という行動は小さくてもその意味はとても大きいこと、さらにもっと多くの人が生活を改め、地球に優しくする心がけを持ってほしいことを訴えました。

美しいランタンは一時的な楽しさで人々を魅了しますが、彼ら平均年齢二十歳の若者達は、そこで娯楽に浸ることを拒み、にぎわう人々の中を歩き回って環境保全

を進めることを選んだのです。若者達の数は参観者に比べるとごく一部ではありますが、時には冷たい目でけげんそうに見られながらも、微笑みで返し、口答えもせず、かと言って引きもせず、心をこめて訴えていました。なんという勇気、そして情熱でしょうか。称賛されるべきです！　彼ら若い世代のボランティア達が創意工夫を凝らしている姿には、ひたむきなエネルギーが溢れていました。そして、環境保全を進めるという使命をその肩に背負っているのでした。若い命の躍動は互いに輝き合うことでさらにその明るさを増し、これから希望の光を灯していくことでしょう！

人生の経済学

◎文・釋徳仉／訳・心嫈

時間を大切にして
善行の意志を堅固にしよう
愛の温もりで、凍てつく寒さを和らげよう

亜熱帯の台湾が猛烈な寒波に襲われました。平野部の気温がなんと摂氏零度以下にまで下がり、台湾の至る所で凍ったように感じられました。精舎の後方の山頂にも雪が積もりました。

上人は二十一日間の行脚を経て精舎に戻られました。朝会の時、「今回の寒波の威力はすごいものでした。寒いという感覚を通り越して、体が凍えかたまった状態なのです。台湾でさえ厳寒の厳しさを味わっていたのですから、ましてやもっと寒い地域では、貧しい人は耐えられるでしょうか」と上人は心配されました。

「高い山に雪がたくさん降ると、珍しい雪景色を一目見ようと多くの人が訪れます。そのような時に、街角で寒さに喘ぎながら耐えている貧困者たちは、この寒波から逃れられる暖かい居場所を見つけたい一心でした」

各地の慈済ボランティアは、冷たい風雨を耐え忍びながら、街角のホームレスのケアに奔走していました。台中の名誉董事チームでは、温かい食物や生薑汁、マフラー、毛布などを自らホームレスの元へ歩いて配って回りました。同行したソーシャルワーカーは彼らに、「寒波の間は収容センターで過ごすように」と説き勧めました。台南のボランティアは、人医会と人安基金会と手を

組み、町の地下道に住むホームレスに施療を行いました。そこでは、多くの人が風邪気味のようで、医者の診療を受けており、薬剤師が薬を配るなどの迅速な支援ができました。

また、高雄の人医会は実業家のボランティアと一緒に高雄県内の甲仙の山間部に入り、独居老人に施療をしたり、住まいを清掃したりしました。さらには屋根の雨漏れを修繕し、部屋の壁塗りなどを行いました。

「台湾はまさに愛と善が満ち溢れた島です。慈済ボランティアは、私心をなくして素直に路上生活者のように困っている人たちのために、愛を込めて支援に携われることに感謝したいのです」と上人はおっしゃいました。

今回の災難は極端な気候変動がもたらしたものだと思います。この事実を私たちにはもはや無視してはなりません。「人びとは無私の精神をもっと高め、地球を愛し、苦しむ人を思いやるようにするべきです。そうしなければ、世の中における人と人との情は薄くなり、冷淡になったり、また自分の意思に逆らうものを恨んだりすれば、もっと深刻な災難になりかねません」

いまだに状況に気づかず悠々自適に過ごしている人は大勢いるようです。「人々はもっと心を清めるべきです。いつもみなに言っていた『急がなければ』、『地球を救おう』という言葉が、私の痛切な訴えなのです」と上人は心配そうに諭されました。

自分自身が手本を示し 善の家風を後世に伝える

台北のボランティア、八十歳の陳阿秋さんとその妻七十歳

の陳呉雪さんは、一男七女の子供を授かりました。二人は墓守りの仕事をしてきました。また、そのかたわらに日雇いの仕事をしたり、田んぼの農作業をしたりして十人家族を養い、生活には決して余裕はないのですが、一家は苦しみを感じず平穏に暮らしていたのです。一九九三年に慈済に出会いました。以来二十三年間、彼らは善を行い寄付するため、毎日三百元（約千円）を貯金することを心に決めました。また、仕事場では環境保全活動として廃棄物を回収したりもしました。息子さんは物分かりもよく、両親の教えを心にして、タバコや酒や檳榔などの悪習に身を染めませんでした。そのうえ両親の善行を見習って、就職してからもお金を貯めては寄付したのです。

陳阿秋さんは長年背骨が横に傾いた持病に苦しんでいましたが、昨年十一月に台北の慈済病院で手術を受けました。ようやく回復した陳さんは、年末の祝福会に夫婦揃って檀上に立ち、長年の苦しみを楽にしてくれた医師に厚く感謝の意を述べて、その喜びと感動を絶やさず笑顔で表していたのです。

「親が自ら手本を示せば、子供も自ずと親の行いを真似していくのです。陳さん一家の生活にはどれほどの辛労があったでしょうか。そして慈済の活動においても、さまざまな不都合なことがあったことでしょう。でも彼らはそうした困難から逃げ出さず、受け止めていく決意を固めて、日々喜んで奉仕していました。ここまでやり遂げられた秘訣は、『心を寛仁に、考えを純粋に』との心持ちでしょう」と上人は、嬉しく諭されました。

桃園にある高齢のボランティア、九十歳の黄洪栖さんは、七十五歳の時に慈済委員（慈済の幹部ボランティア）になりました。慈済委員になった時、自分に残された奉仕できる時間は限られていると自覚しているのです。ですから毎日積極的にボ

ランティアの活動に打ち込んでいました。早朝の三時半に家を出て地域の道場へ通い、朝の勤行を通して法の薫りに浸ります。それから、道場での清掃作業や食事作りに尽くして、充実した一日を過ごされました。

「慈済の菩薩道は、年齢を問わず誰でもが、愛と能力を限りなく発揮して果てしない奉仕ができるのです。だから奉仕するうちに智慧が開き、定まった力を得て、正しい人生の方向に邁進して行きます。たとえ日々忙しくとも心は愉しく、元気よく大地のため、そして人びとのために奉仕するのです」と上人は、時を大切に善用する年配のボランティアたちを褒めたたえられました。真に「時間経済学」の模範です。

お板さんが法の香に浸る

愛を心の底に植えつける

◎訳・済運

潜在意識から出た言葉で悩んだことはないだろうか？　心の中に前世に植えつけられた悪の種子のようなもので、それゆえに思考する間もなく口をついて出てしまう悪の果報のようなものだ。

朝の晨語の時、上人は修行は長い道程であるゆえ、絶えず長期的で間断なく、あますところなく恭しい心で以て日常生活の中で修行しなければならない、と話された。

慈済大事記四月……

訳・済運

◎慈済ヨーロッパ配付チームは3月1日から4月2日までセルビアで2830枚の冬服を難民に配付すると共に、7000食の炊き出しを行った。ヨーロッパ慈済ボランティアの支援活動はこの日一段落し、即席飯は難民委員会に委託し、冬服は倉庫に保管して、後日配付することにした。 ◎慈済香港支部は親孝行の考え方を広めるため、2日と3日に浸会大学講堂で3回、《父母恩重難報経》音楽手話劇の講演を行い、約2000人が来場した。 ◎カンボジア慈済ボランティアはこの日、プノンペン市浄華区で月1回の配付活動を行い、米と麺、砂糖などの生活物資及び生活補助金を27世帯に配付した。4月5日、ボランティアは配付地点に来られなかった18世帯の家庭に出向いて配付をする。	ヨーロッパ慈済ボランティアはセルビア、ルザニ市で水害に遭った79世帯に買い物券を配付し、市長が配付活動現場で慈済に感謝の意を表した。
04・02	04・03

04・05	基隆慈済ボランティアは3月26日、27日及び4月2日から5日まで南榮公営墓地にリサイクルセンターを設置し、墓参りに来る人にゴミの持ち帰りとリサイクル、金紙を燃やさないことを呼びかけた。
04・07	ミャンマー慈済ボランティアは新年恒例の行事である「水掛け」を止め、この日、ケア対象世帯と月1回の医療教育対象者を招待して懇親会を開いた。今回は慈青たちが責任を持って、百十五世帯に油、砂糖、大豆などの物資を配付した。活動中には学費補助対象の生徒が親に浴足活動を行い、親の恩に対する感謝を表した。
04・08	台北慈済病院で「仏教観に基づく生死哲学」講座が開かれた。花蓮静思精舎の徳悦師匠が講演し、約200人の医療関係者と事務関係者及び病院ボランティアが参加した。

04・10	◎中部地区慈済人医会は苗栗県蘭鎮坪林里で月1回の定期施療を行った。台中慈済病院の簡守信院長と10余人の医療人員が参加し、後日の診察に使えるよう、携帯医療Xカードをカルテ代わりに使用した。 ◎北部地区慈済人医会と台北労働力再建運用処及び聯合病院が共同で、台北駅に於いて今年第1回目の「愛を人間に広める――外国籍労働者の健康ケア」活動を催した。施療と衛生教育、質問受付などを行い、125人が訪れた。 ◎慈済アメリカ、ラスベガス連絡事務所はサルベーションアーミーサービスセンターで今年第1回目の歯科の施療を行い、70人に治療を施すと共に、無料散髪と衣類の配付を行った。
04・11	嘉義大林慈済病院は彰化以南で初めて「標的レーザー治療器」を導入した。患者の腫瘍に対してより安全、正確、迅速な放射線治療を行うこと

	ができるようになり、この日、起用発表会が行われた。
０４・１３	第１０回ロータリークラブ公益新聞ゴールデンホイール賞の受賞式が行われた。大愛テレビ局の番組《大愛全紀録》の中の〈融冰之家〉が単独でテレビメディア部類の一般題材項目優等賞を獲得した。
０４・１５	慈済骨髄幹細胞センターとベトナム血液専科病院が協力関係の合意書に調印した。ベトナムは慈済骨髄幹細胞センターと協力関係を結んだ第５４番目の国である。
０４・１６	２０１６年ジュネーブ国際発明展覧会の授賞式が１６日、行われ、静思人文のジンスー多機能折畳式ベッド兼テーブル・椅子（福慧ベッド）がスーパーゴールドアワードとスイス工業設計協会の慈悲科技栄誉特別賞、そして、一体になる福慧ベッドの外装と「ジンスー菩提銅鑼」がそれぞれゴールドアワードを獲得した。中でも「ジンスー菩提銅鑼」はタイ国立研究院から特別栄誉賞を授与された。また、ジンスー・テント型折畳式プレハブ住宅はブロンズアワードを獲得した。
０４・１９	日本の九州熊本県益城町で４月１４日と１６日にマグニチュード６・５と７・３の表層地震が起き、九州地方に被害が出た。慈済日本支部は被災状況の把握を続けると共に、１９日、国会議員の平野達男氏（東日本大震災時の復興庁大臣）を訪ね、支援する用意があることを伝えると共に、支持と被災地の救済部署との連絡に対する協力を取り付けた。

師匠、貴方はどういう人生観をお持ちですか？

今生、この世に生まれて、木の葉の小船のように人生の大海原を漂う中、大波や小波を受けて波間を上下しながらも彼岸に着かなければ、この人生を無駄に過ごしたことになります。人は皆、自分を許すその瞬間から怠け心が起きるのです。絶え間無く、警戒心を持つべきです。

絵・蔡志忠／彩色・慮扶
訳・済運《清らかな智慧》より

慈濟

2016年5月15日発行・２３３号

中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄

Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒112 台湾台北市北投区立徳路2号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校　閲　山田智美
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9920
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒169-0072　東京都新宿区大久保1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いに存じます。（日文組編集同人）